「K」の系譜

★ ＯＢ総会にて

ＯＢ総会の懇親会では、杉崎会長の指揮で、恒例の新入生歓迎会と、奈良インターハイ壮行会を行った。後藤・幸風会長からありがたい「援助」を頂く。私も現役時代、ＯＢ会費で名古屋、秋田の総体に行かせていただいた。
春高はそうやって繋がっているのだ。こんな私も歳を重ねて、そういうものも見えてきた。

「黒須の肘は回復した」・・・と大塚さんは先週言っていた。
もう心配はないだろう。

インターハイ開催地の奈良は瀬上裕司が円盤投げで国体（１９８４）優勝した所縁がある場所。縁起を担ぐのも変だが、こういう域になると「運」や「縁」というのも関係するのかなと思う。
後藤が１００ｍで勝った大阪長居も、５種で後藤秀夫さんが勝った競技場だ。
また黒須の中学の監督は、５年前に後藤

乃毅を指導した監督でもある。やはり何か「表現できないつながり」があるのだろうな・・・と感じずにはいられない。
黒須は「決して大負けしない」という、奥岡、後藤に共通する一流選手独特の特徴も持っている。
自己記録更新で予選通過、春高記録更新で入賞・・・とにかく悔いを残さない試合で閉めくくってほしい。

高校３年の夏は人生で一度しかないのだ。

★ 日本一の男たち

いまさら言うまでもないが、後藤　均先輩は、インターハイ、インカレ、日本選手権、日本記録の全てを採っている偉人だ。そんな後藤均さんが、今回の後藤乃毅の日本選手権１００mの活躍を非常に喜んでいた。

「私はうれしかったよ、野本くん。彼（乃毅）は慶応（慶応 BOY）だからさ、大学で遊んじゃうんじゃないかと心配だったんだよ。」

「なるほど・・・彼は大丈夫ですよ」

「でも良かったよ。１０秒２だろ？すごいよなぁ・・・」

いっしょに大阪インターハイ行って、応援して、乃毅が勝った。（「後藤」では解りにくいので、以下　「乃毅」と記す）当日、後藤さんらと午前２時まで大阪で飲んだ。あれから３年・・・乃毅は立派な青年競技者に成長していたのが嬉しかったようだ。

「こうなったら、日本一になって欲しいよな。彼なら必ずできるよ。」

私もそう思っている。
それは後輩だから・・・という願いではなく、やはり勝つべき「選ばれた人種」なのかな・・・と思う。

無論、高校で全国大会を目指す選手達は、みな必死で練習している。それは当たり前。その中で、インターハイを制する。それは同時に高校生としては驚異的な記録をマークしてしまうことになる。

正直、乃毅がマークした１０秒４１のスーパーな記録は、生涯で越えられなくても仕方ないかな・・・とも思っていた。セカンドベストは１０秒５２だ。インターハイ１００m優勝者・・として大学に進み、期待されるほどの結果を出せずに苦しむ選手は、男女ともに過去にたくさんいる。身体の成熟度を考えても、高校３年にピークを迎えたってなんら不思議は無いのだから。

だから乃毅には「自己記録」のプレッシャーが心配だった。
１０秒４１という数字にこだわりすぎ、精神的重圧で歯車が乱れなければいいな・・と思っていた。

しかし、そんな心配をよそに彼は邁進した。
現在の環境では、毎日動きを見てくれるコーチはいない。
春高で大塚さんにチェックしてもらいながら個人練習に励んだ。
通学に２時間以上。

そんな競技環境で、大学２年生にして全カレ３位に。

天皇賜杯　２００８年　第 77 回日本学生陸上競技対校選手権大会

男子１００m決勝　　風:+0.9

順位	ﾚｰﾝ	No.	氏名		所属	記録	ｺﾒﾝﾄ
1	5	259	江里口匡史	ｴﾘｸﾞﾁ　ﾏｻｼ	早　大 熊　本	10.34	
2	8	299	齋藤　仁志	ｻｲﾄｳ　ﾋﾄｼ	筑　波　大 栃　木	10.36	
3	1	101	後藤　乃毅	ｺﾞﾄｳ　ﾀﾞｲｷ	慶　大 埼　玉	10.42	
4	4	776	矢野　昌幸	ﾔﾉ　ﾏｻﾕｷ	同　大 兵　庫	10.45	
5	6	258	木村慎太郎	ｷﾑﾗ　ｼﾝﾀﾛｳ	早　大 奈　良	10.50	
6	3	257	木原　　博	ｷﾊﾗ　ﾋﾛｼ	早　大 島　根	10.50	
7	2	298	佐久間康太	ｻｸﾏ　ｺｳﾀ	筑　波　大 宮　城	10.61	
8	7	446	藤光　謙司	ﾌｼﾞﾐﾂ　ｹﾝｼﾞ	日　大 埼　玉	10.70	

続く実業団学生対抗では、北京五輪４００ｍＲ補欠の斎藤選手を抑えて優勝を飾った。またしても１０秒４２の安定ぶりをみせた。

秩父宮賜杯 第４８回 実業団・学生対抗陸上競技大会

100m +0.8
後藤　乃毅10.42
木村　慎太郎10.44
齋藤　仁志 10.45

完全覚醒し、実力はステージアップした。

もう私の心配など消し飛んだ。

★「君ならできる！」

後藤先輩は乃毅に熱く語った。必ず日本一になれる！と。

同じ総体の覇者として、そして後藤先輩は日本の砲丸投げに「後藤時代」を築いた先人として、乃毅の未来に光るものを見たのか。

やはり説得力があるなぁ・・・と思ってしまう。

この二人の背負うものは、ちょっと私には感覚的に知りえない領域だ。
高校生の日本一、そして全日本のエースとなりうるには、人智を超えた何かが備わっていないと無理だろうと思った。

強靭な肉体、精神、勝負師の器・・・運命とまとめれば簡単だが、大事な場面で決める！という能力は、後天的ではなく生まれながら、先天的な要素なのでは・・・・と感じずにはいられない。

ちゃっかりと「超人」に混じって一枚写真を。
私なんぞ、杖を付く身。しかし私なりの仕事、役目というものがあるのだ。

★「全然ダメでした・・・」

大塚さんは解っていたろうが、乃毅いわく「日本選手権は全くダメな走りでした・・・」と語った。

簡略にいうと、どうも後半のある部分で「地面を蹴る力」が抜けてしまった・・・という事らしい。聞きかじりの短距離走理論しかない私には、ただただ必死に理解しようと勤めたがその位しか表現できなかった。

今年は１０秒３５でも決勝を逃すという史上最速の国内レースとなった日本選手権。決勝レースも１０秒４４でビリ・・・と、私は過去に見たことが無い層の厚さだ。

そんなレースでの１０秒２８だが、動きも含めた諸々で、満足には程遠い・・・という後藤　乃毅。

記録とか順位というよりも、全てのファクターを統合に成功した形を追い求めているのだろう。やはり天才というのは、アーティスティックなのだな・・・と感心してしまう。

もちろん狙うはロンドン五輪の代表なのだろう。
十分現実性の高い目標だと思う。

「やる」と言いきったことは、はったりではない。実際にやり抜いてしまうのだから。

この写真は２００４年のOB総会での新入生歓迎の記念ショット。

後藤乃毅はこのとき「インターハイは１０秒４で勝ちます！」と宣言し、二年後に現実のものとした。

そして２００９年のショット。
彼の視線は確実に世界への道をとらえている。それは「希望」とか「努力目標」というものではなく、極めて具体的なものが見えているのだと確信した。

筆　撮　　野本　順一